～文化部コーナー～
六甲おろしの風に乗って
第７回　　再度山(その１)

布引支部　神木　哲男

再度山は神戸市中央区の西北、神戸港地方（じかた）と呼ばれる地域に位置しています。「地方」とは、歴史の上では、江戸時代に使われた言葉で、町方(都市部)に対して農村を意味しますが、ここでは海から見た陸地という意味で、神戸港から見た周辺陸地を指し、現在は神戸市の大字名になっています。神戸港の背山（せやま）ー再度山、諏訪山や堂徳山などの山間部と再度筋を合わせた地域を指します。江戸時代には六甲連山(須磨～灘)の山麓南側の幅一里をロー里山、その北側の幅一里を中一里山、最北を奥一里山と称しており、その地名が現在も使われているのです。のちにご紹介する大龍寺の所在地は、神戸市中央区神戸港地方(ロー里山)再度山１となっています。

さて、再度山は標高 470 メートル、三宮の市街からもよく見える神戸市の市章山や錨山の奥に当たります。別名、多々部（たたべ）山といい、再度山の名は、弘法大師(空海)が、延暦 23(804)年、入唐（にっとう）する際、この山に登って航海の安全と求法（ぐほう）の成就を祈願し、大同元(806)年、帰朝した際、再び登って無事帰国を報告したことによるとされています。

六甲山の大部分は、花崗岩で崩落が激しく樹木が根付きにくいといった特徴を持っていますが、江戸時代以降、山麓人口が増加し、建築用材や薪炭として樹木が伐採され、山肌が露出してはげ山となっていました。明治 16(1881)年に、土佐から神戸にはじめて来た植物学者の牧野富太郎は、「私は瀬戸内海の海上から六甲山の禿山を見てびっくりした。はじめは雪が積もっているのかと思った。」と、その自叙伝に書いています。さらに明治 18 年には、「六甲山地から土砂が流失して、山は骨と皮だらけになっている。その骨と皮も崩れつつある」と、報告されています(『兵庫県管内巡察記』)。

明治 34(1901)年、第２代神戸市長に就任した坪野平太郎は、ヨーロッパ留学の船中で知り合った森林学者・本多（ほんだ）静六を招き、六甲山の砂防造林を計画しました。明治 36 年から３ヵ年計画で、本多静六の指揮の下、再度山から植林が始められました。植栽樹種は、クロマツを主材木としてクスノキ・ハゼノキ・クリ・クヌギ・コナラなど落葉樹、広葉樹などをとりまぜ 20 種に及び、四季折々の色彩や樹態などを考えた植林が行われました。

土砂が流れ落ちないように山の傾斜面に階段を造り、切芝を敷きならした上に土を置き、その上にさらに切芝を敷き植栽するという「積苗工法」という方法が採られました。これによって土が固められ、流れる雨水が階段で分散され、植栽された木が倒れずに育つことになります。これ以後も六甲山では砂防と水源の確保のために植林が行われ、六甲山が四季折々にその色彩と山容を変える背山として神戸の街と市民にとってかけがいのない財産になっているのは言うまでもありません。

昭和 49(1974)年、国際植生学会日本大会が開かれ、その現地見学会が再度山で開催されたことをきっかけに、神戸市はこの森の一部を「再度山永久植生保存地」に指定し、以後５年ごとに植生や土壌の変化を調査・記録し、六甲山系の緑の育成や管理に役立てています。昭和 57(1982)年に林野庁が制定した「森林浴の森 100 選」や、森林文化協会の「21 世紀に残したい日本の自然 100 選」に選ばれています。さらに、平成 19(2007)年には「再度山公園・再度山植生永久保存地・神戸外国人墓地」として国の名勝に指定されています。

本多静六博士

積苗工法による植栽(明治 36 年)

現在の再度山